

「膵管像からみた膵疾患の臨床と病理」

福岡大学教授・第1外科 池田 靖 洋

久留米大学教授・第2外科

中 山 和 道

これぞ内視鏡的逆行性膵管造影(ERP), という書である。内視鏡的逆行性膵胆管造影法(ERCP)が開発されて20年以上経過したが, これほど読影可能な鮮明なERP像として膵管の微細な変化を描出してある, 芸術品とも言える写真を数多く収載した書を, 未だかつて見たことがない。

超音波検査, CT, MRI, 血管造影などの画像診断が進歩した現状においても, 膵の微小病変の診断には膵管造影は不可欠であり, これらの診断には分枝膵管を微細に描出しなければならぬ。分枝膵管をきれいに造影せんがために, 不用意に圧をかけて造影を行うと, 急性膵炎を併発する危険性があり, 実際に重篤な合併症が散見されている。著者はERPの診断能向上, 合併症防止の目的で「内視鏡下留置バルーンカテーテルによる膵管造影—背臥位圧迫撮影法」を開発しており, その詳細も第5項目「ERCPの実際」として詳しく述べられている。著者の方法では, 合併症はほとんど見られず, ファイバースコープに邪魔されることなく, 適度の圧迫や体位変換

で, 摘出標本造影に匹敵する鮮明な膵管像が臨床的に描出可能となった。

本書の目次は膵疾患別ではなく膵管の異常別に項目をまとめてあり, 1) 限局性膵管狭窄像, 2) 膵管閉塞像, 3) 膵管異常拡張像, 4) その他の異常像, 5) ERCPの実際, となっている。

それぞれの項目には著者が自らERCPを行い, あるいは手術を施行した膵癌, 慢性膵炎, 膵ラウ腫瘍, 粘液産生膵癌, 嚢胞性膵腫瘍など, ほとんどの膵疾患計69例が見事なERP像, US, CT, 血管造影などの画像や豊富な摘出標本肉眼像, 組織写真を用いて簡潔明瞭に記述解説してある。

更に病理総括, コメントでは, 池田教授の九州大学医学部の同級生で, この領域の病理の第一人者である新潟大学第1病理学教室の渡辺英伸教授とそのグループが執筆協力をし, 本書を一段と格調高いものになっている。

コメントでは, その症例におけるERPの読影, 手技に関する適切なアドバイス, その他, 診断, 治療な

どについて簡潔明快な解説が加えられている。治療において常に患者側に立って考える謙虚な姿勢, 本音の素朴な反省の言葉には, 著者のすばらしい人格がにじみでている。

序文の最初に述懐しておられるように, 池田靖洋教授は高木國夫先生(元癌研究会附属病院外科部長)に師事され, 高木先生が初めてERCPに成功されたとき(1969年6月)も加勢をされた本邦ERCPのパイオニアである。この道の第一人者で, 精悍そのものの正統派の外科医である。

永年にわたり同じ九州の福岡で, 同じく専門分野の膵・胆道疾患の研究, 臨床において切磋琢磨してきた畏友池田靖洋教授が, 面目躍如たる著書を今回出版されたことを心より喜び, 改めて敬意を表する次第である。一読しただけでERP像の読影が数段アップする書であり, 膵臓病学の専門家のみならず, 消化器病学に携わる内科医, 外科医研修医に座右の書としてお勧めしたい。

● A4変型 368頁 図41 写真348
原色図261 1991定価29,870円(税込)
〒400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)